現代文学における「姨捨」の系譜　九

山本昌代「デンデラ野」

工藤　茂

山本昌代の小説「デンデラ野」は、題名のような「棄老」あるいは「姨捨」を主題とした小説ではない。むしろ、あつかましい老婆が狭い団地の三男の家に転がり込み、嫁に嫌みを言われながらもしぶとく居座って、シニカルな目で孫たちの上に現れる危機の兆候を見ているといった内容の小説である。しかしながら、その題名が「デンデラ野」であってみれば、少なくとも小説全体に「棄老」または「姨捨」のイメージが織り込まれているはずである。そこでこの小説を分析した上で、現代文学における「姨捨」の系譜に位置づけることが出来るかどうか、検討を加えていってみたい。

1

〈一九八三年、『応為坦々録』で文藝賞をいただき、小説家としてスタートしたのが二十三歳の時……〉と彼女自身が「緑色の未来」（『新潮』平成七年七月号）に書いているように、山本昌代は津田塾大学在学中に第二十回文芸賞を受賞して、世に出た作家である。北斎親娘を描いた『応為坦々録』以外にも、『文七殺し』、『江戸役者異聞』、『源内先生舟出祝』など、江戸を舞台とした小説を発表し、一方において『善知鳥』や『デンデラ野』などの短編集を持っている。一九八六年に「豚神祀り」で第九六回芥川賞候補に上り、翌八七年「春のたより」で再度第九七回芥川賞候補におされた。しかし、受賞には至らなかった。この二編に雑誌『文藝』（文藝賞特別号・一九八六年刊）に発表した「デンデラ野」一編を加えて、八九年三月に出版したのが前記の短編集『デンデラ野』である。この短編集は平成七（一九九五）年十一

月に新潮文庫に収められた。実はこの年、彼女は『緑色の濁ったお茶あるいは幸福の散歩道』で第八回三島由紀夫賞を受賞する。彼女の小説を賞の選者がどのように読んだのか、参考までに列挙してみよう（注①）。

〈閉塞空間での非劇的劇をガラス細工のように試みようとしているのだろうが、それにしてもなお、いかにも平板で退屈である。〉（石原慎太郎）

〈この家族の日常の脆さ〉、〈はたまたおよそ日常生活そのものの脆さ〉が描かれている。（江藤淳）

〈意図はどうあれ結果的には平均的日常性だけの「静かな小説」になってしまった。〉（筒井康隆）

〈なんだか物足りなさすぎる。せめてもう一味あればという意見は、全委員の一致するところである（略）〉

〈善良で平和な家庭という水槽の底に、仮借のない死の色が沈んでいる。〉（宮本輝）

〈生きて、この世界に繋がるために、なにかを書こうとしているのである。これは「日常生活の平穏さに潜む深淵」〉というふうにとらえられそうな小説だが、それとは〈方向が少し違う。〉（高橋源一郎）

右の傍線は私が付けたものである。おそらく選考委員会の席上で発せられた言葉であったろうと考えたからである。案の定、一九九五年七月号の『新潮』誌上に掲載されている山本昌代へのインタビュー「日常の中の危機の兆候」（聞き手・編集部）の中に、以下のような部分があった。

――選考会では、受賞作の「日常を描く」という手法が話題になりましたが、「日常」ということについて、特別なお考えはありますか？

「私は、小説の方法としてごく自然に日常を描くということを選んでいますから、あらためて考えないですね。小説表現というのは、日常性を表現することだと思います。北斎とお栄の生活を描いた最初の作品から、変わっていないですね。」

このインタビューで彼女はさらに、〈（略）あくまで兆候だけを書いたんです。いつも私のやり方で物足りない人は、そしてどうなったか、そういう部分を書かなきゃ駄目じゃないか、というんですね。でも、今の時点では自分にとってそういうやり方が自然だから、これでいい

と思っています。〉と言い、日常の危機の兆候だけを書くと答えている。また、自分は「書記官」だという姿勢で書いているのだとも述べている。このような山本作品の特色については、茂田真理子も「山本昌代論――二つの家族」（注②）において次のように論じている。

彼女が描くものは、どこにでもあるような日常である。しかしそれが、追体験を求めるような〈風景〉の中にではなく、今ここにいる私たちをもふくんでいるような〈眺め〉の中に描かれるとき、それは奇妙なリアリティーを持って、私たちの目の前に現れる。物語が閉じれば、それで終わり、というものではない。本をおいたその後にも、彼女のまなざしが自分の中に息づいているのを感じる。当たり前に見えていた〈風景〉が、何だか疑わしく思えてくる。

小説集『デンデラ野』に収められた三編もまた、以上に述べられているような彼女の作品の特色を持っている小説である。そこに描かれているのは、家庭生活における日常の相の変質である。それは子どもに顕著に現れる。次に現れるのは老人であり、女性である。それを親と子、あるいは、孫との関係において描いているのが小説「デンデラ野」であった。そうすることによって、社会の日常にいつの間にか忍び寄っている相の変質を、私たちに提示して見せる。ここにこの小説の特異性があったのである。

2

小説「デンデラ野」の登場人物は八十三歳になる吉田のおばあちゃんと、その三男坊の利夫夫婦、それに利夫夫婦の娘と息子、つまり、おばあちゃんの孫たちである。

おばあちゃんは〈防空壕に隠れて戦争を生き残り、細工師の亭主の作りものを百姓に米や芋と換えてもらったりしながら戦後の食糧難をのり越えた。長男夫婦と暮らすうちに亭主を亡くし、十年ほど前今度は長男が病死した。次男坊の家庭に割り込んで、その嫁や孫たちとすったもんだの格闘をしながら、至って丈夫に年月を送った〉。ところが、次男は勤め先で突然倒れて亡くなった。それで三男坊の利夫の家庭にやって来た。利夫が死んだら四男坊の晴夫（ハルオ）の所に行こうと思っている（注③）。

利夫たちは団地の五階にある三ＤＫの狭い家に住んでいる。〈二つの六畳を、二十六になる無職の娘と、予備校通いの十九歳の息子がそれぞれ占領している。残りの一間が夫婦の寝どこで、そこと襖境のダイニング〉に、おばあちゃんは布団を敷いて寝ているのだ。利夫の妻文江は夫のセイジンビョウ（成人病）を、セイシンビョウ（精神病）と勘違いするような女である。その彼女に言わせるとおばあちゃんは〈「年寄らしくなく」朝寝坊だが、ぐっすり眠れるのは健康の証拠だ。歯も丈夫で煎餅も食べられるし、好き嫌いというのがないから何でも来いなのだ。体の具合が悪いところはひとつもない。その割に家の手伝いもしないで、一日中遊んでいる〉。一方おばあちゃんにしてみれば、夫の出社後〈洗濯掃除と腕まくりをする主婦にとって、ダイニングで寝ている姑というのは確かに迷惑な代物〉だろうとは思う。しかしながら、〈長年の習慣は滅多なことでは変えられない。済まないなと思うだけで、あまり反省も身に沁みないのだ〉。

おばあちゃんと孫たちの人間関係はどうなっているのかというと、祖母と孫の関係というよりも、孫の観察者として彼女は描かれている。おばあちゃんの眼は、孫たちに現れる日常の相の変容を容赦なく読み取っていく。と同時に団地という社会の変質をも感じていくのである。

孫の千代子は〈国立を滑って一浪した後、都下の私立の女子大で国際関係学を学んだ。親は二年目も国立を望んだが、共通一次試験の科目数の多さに負（め）げて、予備校入学当初から私大コースを選択した。現役の時と違い、下手な鉄砲も何とかの格言にならって、七校受け他はみんな落ちたのだ。中よりは上の成績で三年までは通し、大学院に進むか否かで担当の教授と相談も何度かした。将来の希望に燃えて元気いっぱいの日々だった〉。そのような彼女に突然次のような兆候が現れる。〈四年の春に、ふと英語が読めなくなった。秋の終わりに退学届けを出すまで、約半年間、白っちゃけた顔をしていた〉。

こうして千代子は大学を辞め、転々とアルバイトの仕事を変えている。つまり、彼女は会社（社会）から疎外されていくのだ。そして、まるで、見えない敵にでも立ち向かうかのように太極拳や空手を習い、ヌンチャクをビュンビュン振り回している。やがて彼女は、鉄製のヌ

ンチャクとヘルメットを買う。そして事故が起きる。千代子の振り回す鉄製ヌンチャクが、過って弟透の頭を打ったのだ。

孫の透は十九歳で予備校に通っている。模試の結果があまり思わしくないらしく、鬱ぎ込んでいる。そんなある日、〈千代子が振り回した凶器が、透の頭を打ったのだ。おばあちゃんは間近で事故の瞬間を見た〉。倒れた孫は救急車で病院に運ばれた。

翌日の昼過ぎ、透は頭に包帯を巻いて戻って来た。〈医者がたいしたことはないと診断した〉という。だが、その後の透には不思議な変化が見られた。電話の受話器を取りメモをしていてふとペンを落とす。落としたペンに視線を向けたまま、うつろな表情をしている。千代子が「透っ」と呼んでも無反応だ。ある時には食事中にポロリと箸を落とす。そして、しばらくは忘我状態になる。入試の時期が近づくにつれて顔つきが暗くなる。おばあちゃんは〈やっぱりあいつはおかしくなっている〉と思う。

「あいつはきっと事故にあって、血をたくさん流して死ぬぞ」

おばあちゃんの脳裡にふと事故現場が映った。黄色い自動車が横倒しになり、撥ね飛ばされた透の頭が割れている。次の瞬間ビル街の路地裏が映った。風体の悪い二人組に恐喝されている透が見える。蒼ざめた態で弱々しく身構えながら何か叫んでいる。二人組みはニヤニヤと笑い、背広のポケットから飛び出しナイフを出すと、透の腹を突く。一回、二回、三回、四回……

そこに透が戻って来る。〈無事に戻って来たのが、おばあちゃんには少しつまらない〉。しかし、その後も孫の異変は続いていく。

透は時々箸を落とす。しばらく空白の表情になる。千代子にしなだれかかる。頭を打ったショックの後遺症か、受験間際のノイローゼか、極く稀にはテレビを見て、誰も笑わない箇所でいきなり、

「わっはっは」

と笑い出すのだ。そんな時母親と千代子がさも不安気に顔を見合わせるのが、おばあちゃんにはゾク

ゾクするほど面白い。

これが孫透に現れた兆候だった。それは少年を襲った日常性の変質と言い換えてもよかろう。既に述べたようにそれは千代子を襲い、次に透の上に現れ、一家の生活を徐々に変容させていく。

次は、団地内の夜の公園での千代子とおばあちゃんのやりとりである。

ヌンチャクが音を立てている間はおばあちゃんは安心してベンチに坐っている。がそれが途切れると途端に不安に駆られるのだ。

「千代子さんっ」

思わず叫んだ。

「なあに」

怪訝そうな声が返る。おばあちゃんは返事に困って、

「あ、あたしは少し、心配なんだけど」

といった。自分でも思いがけない言葉だった。

「何が」

千代子はそう答えたきり少し黙ったあと、

「お父さんなら大丈夫よ、きっと。ちゃんと会社へ行ってるじゃない。検査の結果も少し糖が出ただけよ」

親切な声音だった。わざとらしいくらいだ。透の名前が出るのを殊更に避けたがっているのだとも勘繰れる。

いじわるはやめようと思い、おばあちゃんは透のことは黙っていた。しかし嫌な予感がする。この家に何かこれから良くない事件が起こるとすれば、それは利夫に関わることではないように感じられる。それに利夫はもう年でろくにエネルギーもないから、惨劇を期待できそうもない。

「何もないというのはつまらないからなあ」

以上長々と引用してきたのは、これらの表現が異変の起きた少年透の結末を示す伏線と考えられるからである。この伏線をたどって行くと、この小説の最後の場面をどう読むかが判断出来る。その最後の場面を引用してみよう。

深夜の公園でおばあちゃんに近づいて来る者がいる。男だった。顔を見てやろうと眼を凝らした彼女はあっと

驚いた。それは透だった。

「透っ。どこへ行くんだい」

透は振り返った。おばあちゃんを無関心に眺めて、そこに立っている。

「と……」

ベンチから腰の浮いた格好で、声が途切れた。

透は前に向き直ると、歩き出した。出口を出て、階段を下りて行く。家へと続く道ではない。沿って歩けば、やがてススキの野っ原に出る。街灯も途中でなくなる道だ。

透の頭の先が地面の線から消えた。おばあちゃんはベンチにぺたりと坐り、顔の向きを正面に戻した。

大型トラックが一台、公園の傍を通り過ぎた。

小説「デンデラ野」はここで終わっている。透がその後どうなるかは、読者の想像にまかされる。先に引用したインタビュー記事のように「兆候」だけが書かれ、〈そしてどうなったか〉は書かれないのである。そこでこれまで引用してきた伏線をたどってみると、透のそれからが見えて来る。公園の傍を通り過ぎた一台の大型トラックが事故を起こし、透が撥ね飛ばされる。たとい、その大型トラックでなくても、次の、あるいはその次のトラックに撥ねられて彼は死ぬ。公園の傍の道はトラックの通行が結構多い所として描かれているのだから。そうでないにしても、透はススキの野っ原をさ迷い歩き、もう家には帰って来ない。つまり、彼はこの小説において二度と生きて帰って来ることはないのだ。

ここで捨てられるのは老婆ではなく、少年なのである。かつて、親棄奄の説話で祖父に孝行をする役を果たした孫が、現代の「姨捨」では捨てられるのである。あるいは、少年を襲った変質によって、自らを捨てるのである。「デンデラ野」の特色の一つはここにあった。

それでは、少年がこのようにして消えていくのは、何を意味するのか。次節で、団地の公園から子供の姿が消えていく現象と併せて考えてみたい。

3

見渡す限りの団地群だ。

なだらかな丘の斜面に沿って、白く、四角く、蜿々

と連なっている。

九つに街区分けされ、それぞれ三十棟から成っている。合わせて二百七十棟だが、周辺に別の団地も何種か続いているので、どこが切れ目かわかりにくい。団地の傍におまけのような具合で一戸建ても並んでいる。

「デンデラ野」の文学空間はこのような団地に設定されている。それはいかにも現代的な風景である。吉田のおばあちゃんの住まいはここにある。住所は帷子団地五棟の五階、五ノ五五三号。

〈団地は広いから、公園はいくつもあるが、ほとんどどこへ行っても老人がいる。六、七人固まって遊んでいる組もあれば、ベンチで話し込んでいる人もいる。ひとりでぼんやりしているお爺さんがいるかと思うと、ひとつベンチに仲良く腰かけて、お互いを無視し合っているおばあさんがいる〉。団地の公園は、このように老人たちばかりだ。〈午後学校が退ける時刻になれば、公園も通学路もランドセルや紺の制服で賑うが、陽の高いうちからぶらついているのは、勤めも家事もない年寄だけだ。年寄ばかりが住んでいるような錯覚を起こすほどだ〉。

この小説を読む限りでは、団地の公園に幼児と若い主婦の姿は見られない。老人だけの世界である。従ってそれは異様な光景だ。社会の高齢化と少子化を象徴するような光景である。その上に、孫透に託された少年たちも社会に疎外されて消えて行くのだ。

このような団地の住まいで、ある日、嫁の文江とおばあちゃんとの間に次のような会話が交わされる。

「おばあちゃんデンデラ野って御存知？」

「え」

と訊き返すと、

「デンデラ野。姥捨山よ」

文江は明るい声音で、

「遠野というところにあるんですって、岩手の」

おばあちゃんは黙っている。

「昔は六十になると、みんなそこへ行ったんですって。おばあちゃんはもう八十三ね」

文江は新聞から目を離さず、

「遠野の語部のおばあさんが、今度中野サンプラザ

で昔話をするんですって。新聞見ました？」

「見てないよ」

「今は寿命がのびるばかりで、老人問題なんてやかましいけど、昔の人は偉いものね。身の引き際というのを、みんなが知っていたのね」

嫁の文江の会話は、ずうずうしく自分の家に居座っているおばあちゃんへの当てつけであろう。だが、このデンデラ野のイメージがおばあちゃんの内面で繰り返されていく時、それは団地の光景と重なっていく。都市の郊外のいかにも現代的な団地が、デンデラ野へと変容していくのだ。

ところで、小説ではこの後に〈遠野郷は民話の宝庫として名高い村だ。新聞によると、柳田某という有名な学者の先生が昔語りを本にまとめて以来、名所になったらしい。〉という二行が添えられている。この場面に出て来る「本」とは、あらためて述べるまでもなく、佐々木喜善の話を柳田国男が聞き、それを編纂した『遠野物語』のことである。ここでは　その本からではなく、鬼頭典子が遠野を訪れて書いた一文から、デンデラ野の部分を引用してみよう。

デンデラ野。外国語みたいなこの語は、遠野では「うば捨て」を意味するそうだ。ヨモギがきつくにおう風の細道を山へとたどると、草原が開けた。六十歳になると男も女もこの原に集まり、昼は里の農家を手伝ってわずかの食料を得、夜は原の小屋に帰る暮らしの中で死を待った。（注④）

このような民俗伝承があったことは、直江広治の「親棄山根源記」にも書かれている。「親棄山根源記」は昭和三十七年三月、毎日新聞社から刊行された『日本人物語5』に掲載されたものである。そこで氏は、『民俗学』二巻一号に報告せられた東京北多摩郡の次のような例を引いている。

うばすて山という所があった。そこには五十くらいになったら年寄を棄てるのである。身代のない家の者は、山へ小屋を建てて住む。身代のある家の老人は、その年配になると、いったん山へ棄てられてから、また家へ帰ってくる。その時は、山へ棄てられても身代がないために帰れないでいる者が、送っ

てくれる。そして、その家でごちそうになって、また山へ帰るのである。山から送られて帰った人は、新しい命を得て生き返ったことになり、子供が一人ふえたといって祝われる。そのころ、子供が泣いたりすると「うばすて山から、ふるぢぢ、ふるばばがくるぞ」といって、おどかされたということである。

（注⑤）

右の報告には三つのことが書かれている。第一は、五十以上の年寄たちはうばすて山に小屋を建てて住んでいたこと。第二は、うばすて山は身代のある老人にとって蘇生の空間でもあったこと。第三は、子供たちにもそのことを教えていたこと。遠野のデンデラ野はこの第一と同様の意味を持つ空間であった。

団地の公園が老人たちの溜り場と化す時、そこはデンデラ野のイメージと重なる。換言すれば現代のデンデラ野となるのである。

「デンデラ野」

ふとおばあちゃんは呟いた。

響きが快くて何度か繰り返した。疲れたところでベンチに腰かけても「デンデラ野」「デンデラ野」と呟き続けた。

そして、千代子と公園にいた時、おばあちゃんは

「デンデラ野って聞いたことあるかね」

と尋ねる。

「え？」

千代子は体を動かしながら、咎めるような調子で訊き直した。

「デンデラ野」

「知らないわ、何それ」

おばあちゃんが簡単に説明すると、

「野なの？山じゃなくて。野っ原なら捨てても帰って来ちゃうんじゃないの」

（略）

「でも野も山も呼び名が違うだけで同じようなものかもね。ここらへんだって、十五年前は全部山と野っ原だったんだもん」

なるほどそうか、とおばあちゃんは思う。

その後、千代子は「でもどうして姥捨の話なんかする

の」「そんなこという年寄に限って長生きするのよね」と独りごとを言って公園を出て行く。

団地の向こうにはまだ山が見え、すすきの野っ原も拡がっている。だが、そこもやがては住宅地になるのだろうと、おばあちゃんは思う。かつては姥捨山であったかも知れない団地の一帯。それがやがてまた現代のデンデラ野になっていく。その先に見えているのは、若者もやがて老人になり、その老人たちもあの世へ行ってしまった後、次の若者たちの姿の見えない廃墟となった団地の光景である。この小説に展開されているデンデラ野は、そのようなことを予測させる空間であった。

さて、これまでに眺めてきたように、山本昌代の「デンデラ野」の特色は二つある。その一つは、孫たちに現れた日常性の相の変質。もう一つは、団地空間の「デンデラ野」化。いずれも、二十世紀の社会がもたらした変容と言える。社会を構成するものが人間であることは自明のことであるから、それはまた、二十世紀の人間のもたらしたものであった、と言ってもよかろう。

ところで、最初にも述べたように、この小説は「姨捨」を主題とはしていない。なぜなら、おばあちゃんは捨てられるわけではないのだから。しかしながら、団地の老人たちはある意味では社会から疎外された存在として描かれている。そして孫たちもまたそうである。思い返すと、古くわが国では老人も子供も捨てられる対象であった。姨捨は子捨てと対になっていた。そのように、どちらも疎外されて「デンデラ野」にいるのである。かつて、「デンデラ野」は甦りの空間でもあった。しかし、この小説ではそこはむしろ未来の不毛を予兆する場所として描かれる。

つまり、この小説は「デンデラ野」というイメージを使って、日常の相に起こっている変化、疎外されていく人間、換言すれば、捨てられていく人間を描こうとした作品だったと言うことが出来よう。捨てるのは家族の誰でもない。集団としての人間、つまり、社会である。ということは、この小説の描き出す世界は、古い姨捨のそれだったのだ。もっと分かりやすく言うと、古い姨捨の世界が現代に甦った姿だったのである。古い姨捨の世界では、国の王あるいは殿様、すなわち国が老人を捨てさ

せた。現代はそういう機関、または、組織が人を捨てていくのだ。人々がなかなか気づくことの出来ない、そのような兆候を描いた「デンデラ野」は、その点において日本の文学を縦に貫いている「姨捨」に連なっていたのである。

（注）

注①　『新潮』（一九九五年七月号・新潮社）の三島由紀夫賞の「選評」による。

注②　『文学界』（平成九年七月号・文藝春秋）掲載。

注③　三枝和子は『デンデラ野』（新潮文庫）の「解説」でこのおばあちゃんについて、次のように述べている。

〈このおばあちゃんが凄い。家族から邪魔もの扱いされているが、ケロリとして、堂々と生きている。そしてちょっぴり悲しい。そして、おばあちゃんが3DKの「デンデラ野」でケロリとして居られるのは、家族がみんなばらばらで心が通いあっていないせいだという奇妙な矛盾が浮びあがってくる。作者の鋭い人間考察である。〉

このあと彼女は丹羽文雄の『厭がらせの年齢』と比較しながら〈おばあちゃんのニヒリズムはこちらの方がずっと深い〉と締め括っている。この小説に〈家族がみんなばらばらで心が通いあっていないせいだという奇妙な矛盾〉を指摘する彼女のまなざしは、鋭い。

注④　「旅・人・こころ　遠野」（「朝日新聞」一九九二年七月二六日・日曜版）

注⑤　ところで直江広治は、さらにこの章全体をまとめて、〈そこで思い合わされることは、日本人の葬制ならびに山岳信仰である。死体を山に葬り、山を霊魂のとどまる場所とみる信仰が、古くから日本人の間にあった。そうした死霊のとどまる山の信仰が、親棄山の話を引きよせて、話の枝葉を繁茂させ、かつこれに現実性を与える根拠になってきたのではあるまいか〉と結んでいる。